

宮崎「橋の日」活動 25周年を迎えて

8月4日

みんなをつくらう「橋の日」
提唱の日

第1回橋の日イベントで「橋の日」を提唱

宮崎「橋の日」実行委員会
事務局長 鶴羽 浩



「橋の日」は、今から一六年前、昭和六〇年に宮崎県延岡市出身の湯浅利彦さんが提唱された宮崎発祥の記念日である。

湯浅さんは子供の頃、延岡市街地を流れる大瀬川で毎日のように泳いだり、魚を獲ったり、また橋を望みながら、まるで河童のように川で遊んでいたという。ところががある日、洪水によって木橋の大瀬橋が流され、町が分断、橋の存在の大きさやありがたさを子供心に思い知らされたとお聞きした。

湯浅さんはその後、橋梁メーカーに勤務。「橋との触れ合いを通じて故郷を愛する心を育てたい」という熱い思いが、年を重ねられることに募り、昭和六〇年、八月四日を「橋の日」と提唱された。

さっそく翌六一年に湯浅氏参加のもと、延岡市の大瀬川に架かる旧・安賀多橋で全国に先駆け「橋の日」活動が実施された。「延岡の橋今昔」の写真展、橋の早朝清掃、橋に生け花、郷土芸能保存会による踊り奉納、高欄に風鈴やパラソルを取り付けるなど、橋に感謝すると共に「橋の日」を祝う行事が多彩に練り広げられた。そして翌六一年には宮崎市において宮崎「橋の日」実行委員会が発足、宮崎市の母なる川、大淀川に架かる橋橋を会場として、第一回宮崎「橋の日」のイベントを実施した。以来、今年で活動一五周年という節目の年を迎えるに至った。

「橋の日」一五年の歩み

今振り返ってみると、最初の〇年間は「橋の日」という経験のない活動を手探りの中で押し進めるといふ基礎づくりの期間だったと思う。

まずは、組織づくりから始まった。当時の松形宮

崎県知事の賛同を得て、「新ひむかづくり運動県民会議」会長・塩見 郎氏を当会会長に、事務局長の青井正彰氏を副会長に迎え、宮崎大学工学部・藤本廣教授に相談役をお願いした。

次に「橋の日」のシンボルマークの制作では、全国に公募、〇五名の応募の中から選定した。さらに「橋の日」の歌の制作をおこなった。

また平成六年には念願であった日本記念日協会から八月四日「橋の日」の認定を受けることができ、相当勇気づけられたものである。この頃より行政や団体からの物心両面にわたる支援が受けられるようになり、地元高校からも毎年一〇〇名以上の学生の参加をいただくようになった。

実行委員会では、「橋の日」を盛り上げるため、さまざまなイベントを企画し、橋橋周辺の清掃はもとより、橋への感謝を込めた献花、各界の方々にご参加いただいた橋の座談会、橋のパネル展、稚魚の放流、また歌や太鼓など、自らも楽しみながら、橋のお祭りとして賑やかにやってきた。

十年目からは、地域に根ざした活動に力点を置くようになる。「邦成没後 〇〇年パネル展」では、橋橋の歴史を調べていくうちに、「初代橋橋」を架けた医師・福島邦成の存在を抜きにして地域を語れないことを知った。福島邦成は、橋が宮崎市のまちづくりの原点であるとの想いで、宮崎を活性化させるために橋橋を架橋しただけでなく、宮崎の近代化に尽くした人である。邦成の居宅が宮崎市内に現存し、築一〇〇年を経た武家屋敷であることも知った。

また、平成十一年には宮崎県内に存在する九 橋



橋の日まつり
子どもひよっこ若芽会(1997)

過去最高の220名が参加した
第25回「橋の日」イベント(2011)

の石橋をまとめたポスターを制作し、県内の全小中学校・高校に配付した。

さらに平成十五年には、「宮崎の橋一〇一選」ポスターを制作。これは県民から応募していただいた県内の魅力ある橋、総数二〇二橋の中から、一〇一の橋を選定したものである。このポスター制作を通して、橋梁は全て先人の努力と知恵、技術の賜であることを認識し、改めて地域を知り、愛するきっかけとなった。

「橋」がつなげる地域連携へ

活動二〇周年を迎えた平成十八年以降、地域との連携を大切にしてきた。

兼ねてからあためていた「橋の日サミット」を開催したのである。全国の代表的「橋の日」活動団体を宮崎にお呼びして、パネルディスカッションを盛会のうちに実施することができた。

また、宮崎市大淀川に新設された天満橋のオープニングイベントへの参加や道路愛護活動を続ける「道守会」の皆さんと「橋橋フラワーブリッジ」イベントの共同開催、先述した福島邦成邸の移築保存運動に関わる見学会イベントへの協働参加、宮崎県との協働企画による「てげいっちゃん」が（宮崎弁でとてもいいですよ）宮崎の橋」ポスターの制作など、地域の団体等との協働活動に努めた。これは、宮崎県内に現存する主な「はし遺産」を、県外にアピールすると共に、県民が「はし遺産」の価値を見つめ直し、地域活性化へ活用する契機とするものである。そして活動二五周年の昨年は、「橋を通じた地域づくりシンポジウム」を八月十九日に開催、東京、

福岡からも参加いただいた。

シンポジウムでは、地域づくりには長い時間と多くの人々の想いや熱意をとぎれることなく継いでいくことが大事であること、子どもたちに記憶を継ぎ、夢を語る地域づくりには、「橋」は誰にも理解しやすいテーマであること等を改めて感じ、勇気ももらった。また、橋の歴史を振り返る中で、そこには「人」がいて「夢」があつて、「技術」がある。人に愛される「橋」をつくりたい、百年も残る橋をつくりたい。その強い思いを地元で育て、そして生かしながら、継承していこうとする仲間達がいることを知った。その継承を支えているのは信頼関係である。

これまで、全国の「橋の日」活動団体へ、情報の提供やのほり職の提供などの活動が続けてきた結果、宮崎で生まれ育った「橋の日」運動は、いまや全国二〇道府県まで拡大した。これからもその輪が層広がつて大きな力となることを願いたい。

現在、実行委員会メンバー四〇名（会長・日高孝）で活動が続けているが、ここまでこれたのは、地域の団体企業・行政・教育機関そして地域住民の理解と協力のおかげだと深く感謝している。こうした地域の支援に報いるためにも「橋の日」活動の成果を県民に発信し続けることが大切だと痛感している。

地域の明日を思い、さらに何かできないか、「橋の日」を通して、地域の魅力を伝え、地域住民との協働作業によるまちづくりにまい進し、「人と人」「地域と地域」とのつながりを取り戻す「架け橋」になりたいと、二五周年を迎え決意を新たにしているところである。